



秋播牧草の選択で特に注意したいもの

クリムソンクロバー

一年性(暖地では越年性)のまめ科牧草で早春の萌芽生長極めて早く、初期収量は最大で、早春の青刈用として最適である。また日陰に強いことも大きな特徴で、他作物との間作、果樹園、菜園等に間作して被覆兼緑肥として利用するのが適当である。土壌に対する選択性は少ない。若し軽い砂壤土、火山灰土によく生育し、軽度の酸性土壌にも、有機質が十分あればよく生育する、また連作の害も少なく四〜六年の連作でも収量の低下を見ない。飼料価値も赤クロバーとほぼ同様で、家畜の嗜好も鶏以外は総べて良好である。飼料用としては秋九月上中旬頃畦幅二尺の条播として単播するか、土地の集約的な利用の面から畦幅二・五尺〜三尺として条播し、畦間に麦類をまくのもよい。又た青刈ライ麦、青刈燕麦、イタリアングラス等に間作するのもよく、牧草の作付計画には必ず取入れるべきものの一つである。

イタリアンライグラス

まめ科のクリムソンクロバーとならんで、暖地における早春青刈用として、いね科では代表的な牧草である。短年性(府県でも一年性で越年する)で、耐暑性は比較的弱いので八月下旬から十月中旬頃までに播き、冬から早春にかけて利用するものが普通である。関東以南であれば冬季間でも青々として生育しており、再生力も旺盛で家畜の嗜好は極めて良好、若い内は蛋白質含量高く、その乾草は濃厚飼料にも匹敵する良質のものである。永年牧草と混播してその初期収量を補うために利用することも出来るし、水田の裏作として、稲刈後、あるいは立毛中落水十日後位に反当五〜六听撒播して晩春まで二〜三回刈取りあとは緑肥として鋤込むのもよい。最も有利なのはクリムソンクロバーとの組合わせである。冬期間にはクリムソンを保護し、開花期を初め生育上の特性が一致しているのも最も有利に利用出来る。

耐酸性、耐湿性、耐病性のアルサイククロバー

アルサイククロバーは耐酸性と耐湿性に勝れていることは既に定評のあるところであるが、さらに耐病性が強いので、赤クロバーのように銹病、炭疽病に犯されることがないなど、多くの特徴をもっている。また寒さにも強く積雪下も冬枯れすることなく、霧のある海岸地帯のようなどころでもよく生育する。土地を選ばず、酸性地(PH五・五〜七・〇)泥炭地や重粘地でも生育し、特に半湿田、排水不良地等赤クロバーやレンゲが生育しない土地でもよく育つので、今後これら不良条件地帯の土地におけるまめ科の牧草として、赤クロバーやレンゲに替るものとして大いにその利用を増したいものである。またその栽培法は概ね赤クロバーに準ずるので普及も容易である。養蜂の蜜源としても頗る重要なものである。

能率的な放牧草 ラデノクロバー

近年欧米諸国は勿論本邦においても非常な勢で普及し、家畜といえればラデノクロバー、ラデノといえれば放牧地というように酪農経営の合言葉となつて登場して来たのがラデノクロバーである。飼料畑の面積と労力を節約し、しかも乳量を飛躍的に増加することの出来る牧草があるとすれば、それはラデノクロバーである。ラデノクロバーは白クロバーに比し遙かに大型で、生長力強く収量が極めて多いためばかりか蛋白質及石灰分に富み、家畜の嗜好と消化も非常によい。更に土地を選ばず、家畜の蹂躪に耐え、再生力が旺盛なことは、正に放牧草として有畜農家の要望に副う最良の牧草である。

ラデノクロバーの最も効果的な利用法は、その旺盛な再生力と強靱な蔓延力を活用して放牧地とし、早春から晩秋まで連続的に放牧給飼する方法が最もよい。刈取利用の場合について見ても、旧の状態まで回復するのに大体四週間であるから、寒地でも四〜五回、暖地は七〜八回の刈取が可能である。路傍、堤防、河川敷地等の草化、果樹園、菜園の下草として土壌の侵蝕防止、被覆用、緑肥用としても効果的である。栽培に当つては、堆肥、石灰等を施せばさらに効果的である。とにかく有畜経営においては多かれ少なかれラデノクロバーを栽培することが常識となつて来たことは事実である。大いにその普及を図りたいものである。

栽培容易で見逃がせない赤クロバーとオーチャードグラス

赤クロバーとオーチャードグラスはいずれも栽培容易で生も旺盛なことから、北は北海道から南は九州まで到るところで栽培され、最も重要視されている牧草である。赤クロバーは家畜の嗜好は極めてよく、蛋白質も多く、石灰分にも豊富で、再生力も強い。また豊富な根群とそれに着生する根瘤菌による効果も極めて顕著である。

オーチャードグラスは、草勢強く、栽培容易で、放牧地、採草地用として利用価値が高い。乾燥に強く路傍の水分不足の場所にもよく生育するので農道の草生改良等には最適である。採草地として利用する場合、前記赤クロバーとの混播が最もよい成績を挙げられる。